

神からの栄誉を求めて

ヨハネの福音書 5章 41-47節

はじめに

イエス様はある安息日に、三十八年も病気にかかっている人に「**起きて床を取り上げ、歩きなさい**」(5:8)と言われて、その病気を癒されました。ユダヤ人たちは、床を取り上げて歩いている人を見ると、「**今日は、安息日だ。床を取り上げることは許されていない**」と言いました。安息日には、仕事をするのが禁じられていましたが、ユダヤ人たちの中では、「床を取り上げて歩くこと」も仕事と見なされたのです。「床を取り上げて歩くこと」は、荷物を運ぶ労働と考えられたのです。

ユダヤ人たちは、「床を取り上げ、歩け」と命じたイエス様を、律法違反者と見なしました。そればかりでなく、神様を自分の父と呼び、自分を神様と等しい存在とされたイエス様を迫害し始め、殺そうとまで考えるようになったのです。

今日の聖書箇所には、そのようなユダヤ人たちに語られたイエス様の言葉が書かれています。

1. 人からの栄誉ではなく、神からの栄誉を求める

まず 41-44 節を見てみましょう。「**わたしは人からの栄誉を受けません。しかし、わたしは知っています。あなたがたのうちに神への愛がないことを。わたしは、わたしの父の名によって来たのに、あなたがたはわたしを受け入れません。もしほかの人がその人自身の名で来れば、あなたがたはその人を受け入れます。互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めないあなたがたが、どうして信じることができるでしょうか**」。

イエス様はここで、「わたしは知っています」と言われます。イエス様は、ユダヤ人たちのことをよく知っておられるのです。2:25でも、「**イエスは、人のうちに何があるかを知っておられたのである**」とありました。イエス様は、人の外側だけでなく、人の内側のことも知っておられるというのです。私たちは、人の外側だけしか分かりません。人の行動や言葉から、その人の内側を想像することしかできません。しかしイエス様は、全知全能の神様ですから、人の内側をよくご存じなのです。ここでは、ユダヤ人たちの内側にあるものをよくご存じなのです。

ユダヤ人たちは、イエス様に対して律法違反を指摘するほど、律法を守ることに熱心でした。また前回学んだ 5:39には、「**あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています**」とあったように、ユダヤ人たちは、聖書をよく読み、よく調べ、よく研究していました。そのため聖書の知識も豊富でした。ユダヤ人たちの外側は、聖書をよく学び、

律法をよく守る、信仰に熱心な人たちに見えました。しかしイエス様は、彼らの内側にあるものを見抜いていたのです。

42 節でイエス様は、「あなたがたのうち神への愛がない」と言われます。44 節では、「互いの間では栄誉を受けても、唯一の神からの栄誉を求めない」と言われます。イエス様は彼らに、「あなたがたには神様への愛がない、人からの栄誉を求めてばかりで、ちっとも神様からの栄誉を求めていない」と言われるのです。一言で言えば、「あなたがたは神様のことなんか少しも考えていない。人間のことばかり考えている」ということです。人から褒められること、人から認められること、人からの名声を手に入れることばかり求めていると言われるのです。

なぜ彼らには、神様への愛がないのでしょうか。それは、人からの栄誉ばかり求めているからです。なぜ彼らには、イエス様を信じることができなかったのでしょうか。それもまた、人からの栄誉ばかり求めているからです。彼らは、聖書をよく学び、律法をよく守る人たちでした。しかし彼らは、神様を愛するがゆえに、聖書をよく学び、律法をよく守っていたのではないようです。神様からの栄誉を求めるために、聖書をよく学び、律法をよく守っていたのではないようです。彼らは、人から褒められ、認められ、名声を手に入れるために、それらをしてきたようなのです。

彼らの関心は、神様ではなく、人なのです。神様の御前に生きるよりも、人の前で生きることを求めたのです。神様の目よりも、人の目を大事にしたのです。彼らの心の中が、人からの評価で埋め尽くされていく時、神様への愛がだんだんと冷えていくのです。彼らの心の中が、人からの評価で埋め尽くされていけばいくほど、イエス様が真の神様であることが分からなくなるのです。

イエス様は、ヨハネ 7：16-18 で、このように言われました。**「わたしの教えは、わたしのものではなく、わたしを遣わされた方の者です。だれでも神のみこころを行おうとするなら、その人には、この教えが神から出たものなのか、わたしが自分から語っているのかが分かります。自分から語る人は自分の栄誉を求めます。しかし、自分を遣わされた方の栄誉を求める人は真実で、その人には不正がありません」**。

イエス様はここで、神様の御心を行おうとする人は誰でも、イエス様が真の神様であることを見分けることができると言われるのです。つまり神様を本当に求めている人には、イエス様が真の神様であることが分かるというのです。なぜユダヤ人たちは、イエス様が真の神様であることが分からなかったのでしょうか。それは、彼らが神様を求めていなかったからです。彼らが人からの評価ばかり求めていたからです。人からの評価ばかり求めていると、私たちも神様への愛が冷えていき、イエス様への確かな信仰を持つことができなくなるのです。

イエス様は、その人が真実であるかどうかを見分けるコツを教えておられます。真実である人は、「自分を遣わされた方の栄誉を求めると」言われます。つまり神様の栄光を求めます。その人には、不正がないとも言われます。では逆に真実ではない人とは、どんな人とし

ようか。それは「自分から語る人」です。自分から語る人は、自分の栄誉を求めているので、求められてもいないのに自分から語り出すのです。そういう人は、真実ではないのです。ではイエス様はどうでしょうか。41 節でイエス様は、「わたしは人からの栄誉を受けません」と言われます。イエス様は、人からの評価を求めませんでした。人から褒められること、認められること、名声を手に入れることに一切興味を示しませんでした。ただひたすら、父なる神様からの栄誉を求め、最後は十字架の死にまでも従われたのです。それゆえに、イエス様こそ真実であると言えるのではないのでしょうか。

私たちは決して、ユダヤ人たちを批判することはできません。なぜなら私たちは、人からの評価、人から褒められること、認められること、名声を手に入れることから、完全には自由になっていないからです。目に見えない神様からの評価よりも、目に見える人からの評価を求めることもあります。天の御国での報いよりも、地上での報いを求めることもあります。しかしイエス様は、人からの評価を第一に求めることの危険性を指摘しておられます。人からの評価を第一に求めれば、神様への愛が冷えていき、イエス様への確かな信仰も揺らいでいくでしょう。また人からも信頼されなくなるでしょう。私たちは何よりも、神様からの栄誉、神様からの評価を求めていきたいものです。たとえ誰にも見えてなくても、神様はすべてを見ていてくださる方です。

2. モーセが書いたものを信じる

次に 45-47 節を見てみましょう。「わたしが、父の前にあなたがたを訴えると思っ**てはなりません。あなたがたを訴えるのは、あなたがたが望みを置いているモーセです。もしも、あなたがたがモーセを信じているのなら、わたしを信じたはずです。モーセが書いたのはわたしのことなのですから。しかし、モーセが書いたものをあなたがたが信じていないのなら、どうしてわたしのことばを信じるのでしょうか。**」

ユダヤ人たちは、「モーセ」に望みを置いていました。モーセは、旧約聖書の最初の五書を書いた人物と考えられていました。モーセと言えば、「律法」を意味していました。彼らは、律法に望みを置いていました。律法を熱心を守ることによって、永遠のいのちを得ようと考えていました。それゆえ彼らは、自分たちのことを「**モーセの弟子**」(9:28)と言ったほどです。

では、モーセは律法のことだけを書いたのでしょうか。そうではありません。イエス様によれば、「モーセが書いたのはわたしのこと」だと言われます。イエス様は、前回学んだ 5:39 でも、「**聖書は、わたしについて証しているものです**」と言われました。ここでの聖書は、旧約聖書を意味します。イエス様は、旧約聖書はイエス様について書いてあると言われるのです。モーセが書いたとされる申命記 18:15 にも、こういう言葉があります。「**あなたの神、主はあなたのうちから、あなたの同胞の中から、私のような一人の預言者をあなたのために起こされる。あなたがたはその人に聞き従わなければならない**」。ユダヤ人たちの中では、モーセのような預言者こそ、「メシア」「キリスト」だと考えられていました。その意味で、モーセ

のような預言者こそ、まさにイエス様を証ししているのです。

イエス様は、ユダヤ人たちはモーセに望みを置いていると言われますが、モーセを信じていないとも言われます。「モーセを信じる」とは、47節では「モーセが書いたもの」と言い換えられていますから、それはつまり律法や旧約聖書のことです。イエス様は、彼らが旧約聖書を信じていないと言われるのです。旧約聖書を信じていれば、イエス様のことも信じられたはずと言われるのです。なぜなら旧約聖書は、イエス様のことを証しているからです。ユダヤ人たちは、聖書をよく読み、よく調べ、よく研究していました。そして聖書に書かれている律法を熱心に守りました。しかし彼らは、聖書を信じていなかったのです。彼らに足りなかったものは、聖書の知識でもなく、敬虔な生活でもなく、信仰だったのです。どんなに聖書をよく学び、律法をよく守っていても、信仰が足りないということが起こり得るのです。

イエス様が今日の聖書箇所で求めているのは、一言で言えば「信仰」です。聖書を信じること、イエス様を信じることです。福音書の中に、イエス様に癒された人が何人も出てきますが、その人たちにイエス様が求められることは、「信仰」です。イエス様に対する信仰です。私たちも、この信仰というものを、知らず知らずのうちに置き去りにしてしまうことがあるのかもしれませんが。確かに、クリスチャンになった時は、信仰を強く意識したでしょう。しかし、その信仰は磨かれ、強められていかなければなりません。信仰とは、神様またはイエス様に対する心からの信頼です。自分を委ねる心と言ってもよいかもしれませんが。しかし私たちは、クリスチャンになって時間が経つにつれて、クリスチャンらしくなるかもしれません。礼拝を忠実に守り、聖書の知識も増え、奉仕にもよく取り組み、倫理・道徳的にも整えられてくるかもしれません。しかしどんなにクリスチャンとしての外側が整っても、肝心な神様またはイエス様に対する信仰、つまり信頼、委ねる心が育っていないということが起こり得るのではないかと思います。

そのことが顕著に現れるのは、私たちの試練の時です。私たちの神様への信仰、信頼、委ねる心が露わにされるのは、試練の時です。順風な時、平和な時は、私たちの信仰、信頼、委ねる心は隠されています。しかし、突如現れる試練の時、病気になった、家族に問題が起きた、経済的に困難に陥ったなど、そういう時に、私たちの信仰、信頼、委ねる心は露わにされます。Ⅰペテロ 1：7には、こういう言葉があります。「**試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称赞と栄光と誉れをもたらします**」。私たちの信仰は、試練の時に露わにされ、試されるのです。

私たちが何よりも育てなければならないのは、信仰ではないでしょうか。クリスチャンとしての外側を整えるのではなく、神様またはイエス様に対する心からの信頼、自分を委ねる心こそ私たちは育てなければならないのではないのでしょうか。そして、その信仰、信頼、自分を委ねる心の延長線上にあるのが、永遠のいのちです。イエス様は、5：24でこう言われました。「**まことに、まことに、あなたがたに言います。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わされた方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきにあうことがなく、死からいのちに移っています**」。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの信仰は本当に貧しく、あなたへの信頼に欠けます。人からの評価に捕らわれ、そこから完全に自由になることができません。どうかただひたすらあなたからの栄誉を求めることができますように。そしてあなたの御前に、あなたのまなざしの中で生きることができますように。そして、私たちのすべてを知っておられる神様の御前で、あなたに対する心からの信頼、委ねる心を育てていくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。